周知へ連携さらに

パネルディスカッションは「岩手県における妊孕性温存療法の現状」をテーマに行われました。岩手医大産婦人科学講座の馬場長教授が座長を務め、産婦人科、血液腫瘍内科、泌尿器科の医師と胚培養士がそれぞれの立場から報告しました。

座長
馬場　長氏（岩手医大産婦人科学講座教授）

パネリスト
小原　航氏（岩手医大泌尿器科学講座教授）
伊藤　薫樹氏（岩手医大内科学講座血液腫瘍内科分野教授）
尾上　洋樹氏（岩手医大産婦人科学講座助教）
小岩　佳夏子氏（岩手医大附属内丸メディカルセンター生殖補助医療胚培養士）

パネルディスカッション

岩手県における妊孕性温存療法の現状

馬場　長（ばば・つかさ）　1998年京都大医学部卒。米デューク大婦人科腫瘍研究員、京都大産婦人科准教授などを経て2018年岩手医大産婦人科学講座教授。22年より同大附属病院副院長兼任。

治療遅延は最小限に

小原　航　岩手医大泌尿器科学講座教授

精巣腫瘍（精巣がん）は20～40代の男性に発症することが多いがんです。人口10万人あたり1～2人というまれながんで、岩手では年間10～20人ほど、中には高校生ぐらいの年齢で発症することもあります。

男性において、抗がん剤による造精機能の低下は非常に深刻な問題です。抗がん剤によって15～30％の患者さんが半永久的な不妊を来すという報告もあります。精巣がんの標準治療として、精巣にがんが限局している場合は摘除する必要があります。転移がある場合には抗がん剤治療が実施されます。主要薬剤として用いられるシスプラチンという抗がん剤が造精機能障害を来し、無精子症になるリスクが高くなります。一方で精巣がんは9割以上の症例で治癒が可能です。

男性に行う妊孕性温存療法は年齢制限がなく高齢でも子どもを希望する方には可能です。方法は射精された精液から精子を採取・凍結保存し、がん治療終了後に融解して使用します。何らかの原因で射精ができない方や無精子症の場合は、精巣から精子を回収する方法もあります。

患者さんに対する妊孕性温存の説明は、がん治療の開始前が推奨されます。しかし、妊孕性温存療法に伴うがんの治療開始の遅延は、最小限にとどめる必要もあります。精巣がんの場合、抗がん剤治療の1～2週前に精子凍結を行い、抗がん剤治療を速やかに開始した方が良いとも言われています。また、進行がんなどすぐに抗がん剤治療を開始すべき症例では、精子凍結の可否は個々の判断によります。

がん患者さんに対しては基本的にがん治療を優先しますが、妊孕性温存を希望される患者さんに対して、がん治療医は丁寧な情報を提供することが必要です。がん治療医と生殖医療専門医とがより密に情報交換を行い、がん患者さんとご家族の健康や幸せにつながるよう努めていくことが求められます。

小原　航（おばら・わたる）1997年岩手医大卒。東京大学医科学研究所客員研究員、岩手医大泌尿器科講師などを経て、2014年同大泌尿器科学講座教授。22年より岩手医大附属病院がんセンター副センター長を兼任。

適切な情報提供必要

伊藤　薫樹　岩手医大内科学講座血液腫瘍内科分野教授

血液腫瘍内科は白血病や悪性リンパ腫といった比較的若年者に多いがんを扱います。血液のがんの治療では、抗がん剤投与や放射線の照射を行います。これが性腺（精巣・卵巣）に悪影響を及ぼしてしまいます。

特に骨髄移植をはじめとする造血幹細胞移植の前処置の段階で、大量の抗がん剤投与や全身放射線照射を行うため、高頻度に不可逆的な性腺機能障害が生じることがあります。移植後の合併症も妊孕性に影響を与えることがあります。一方、女性の卵巣機能は多くの場合、時間とともに回復すると言われています。

厚生労働省の調査研究によると、血液内科医で精子凍結を「患者全員に説明する」と回答した医師は4割弱であり、医師により考え方にばらつきがあるのが現状です。また、患者側が精子保存を断る理由は「治療を急ぐ」「病気のことでそれどころではない」「未成年だから」が多く、将来を見据えた治療であるという認識が患者側にも不足していることが見受けられます。

伊藤　薫樹（いとう・しげき）1991年岩手医大卒。米インディアナ大研究員、岩手医大臨床腫瘍学講座教授などを経て、2019年同大血液腫瘍内科分野教授。

実際に当科で2018年から22年までに妊孕性温存の説明を行った患者さん19人中、12人が温存を希望し、半数の6人が凍結保存できました。そのうち、現在までに1人が子どもを授かっています。

血液疾患では、原疾患の治療が優先されるため妊孕性温存の十分な説明がなされないことや、患者さんも病気のことで頭がいっぱいになってしまうという課題があります。ですから患者さんが落ち着いたタイミングで説明しなければいけませんし、正しい情報提供を行うための資料も必要です。

がん治療医やメディカルスタッフへの教育も行い、患者さんや家族に対して妊孕性温存の具体的な内容、実施施設、費用、補助金制度などを説明することも求められます。

血液疾患は温存処置のタイミングが難しいので、専門医との密な連携体制の構築も欠かせないと思います。

妊孕性温存をテーマに行われた岩手県がんフォーラム

早期発見で温存可能

尾上　洋樹　岩手医大産婦人科学講座助教

がんを経験したAYA世代（15～39歳）の患者さんには、さまざまな悩みがあり、その中に「将来子どもを授かることができるのか」という妊孕性に関わるものもあります。厚生労働省のアンケート調査によると、医療従事者に対して将来の妊娠に関することを「聞きたかった」という患者さんのうち、約4割が「聞けなかった」と回答しています。

代表的な婦人科がんは、子宮頸（けい）がん、子宮体がん、卵巣がんの三つがあります。これら、妊娠に直接関係のある臓器のがんになっても妊娠出産ができるのかというと、妊娠は可能ですが、初期のがんに限られるのが現状です。

子宮頸がんは、予防ワクチンや子宮頸がん検診が確立されていますので、早期発見が重要になります。子宮体がんは、比較的再発率が高いので、病変が消えたらすぐに妊娠に向けた取り組みをすることが重要です。卵巣がんについては、片方の卵巣にのみ病変がとどまっているような初期の一部症例で温存が可能となります。

当院に通院されているがん体験者で、実際に不妊治療をしている方は、年間10～20組程度います。受精卵や精子、卵子の凍結保存は年間数人から10人程度行っています。

私見ですが、妊孕性温存療法が広がっていくためには、学校教育や今回のようなフォーラムを通じて、がんになる前に妊娠出産について考える機会を持つことが重要だと思います。

また、患者さんには「こんな時に医師に治療以外の質問をしていいのか」というためらいがあると思いますので、医療従事者から患者さんへの情報提供も重要です。

妊孕性温存療法は患者さんへの十分な説明と、医師、胚培養士、看護師、行政の連携、家族やパートナーの協力態勢が不可欠だと思います。

尾上　洋樹（おのうえ・ひろき）　2003年弘前大医学部卒。県立二戸病院医長、岩手医大産婦人科助教、山王病院リプロダクション・婦人科内視鏡治療センターなどを経て15年より岩手医大産婦人科学講座助教。

卵巣凍結の標準化を

小岩　佳夏子　岩手医大附属内丸メディカルセンター生殖補助医療胚培養士

胚培養士は、不妊治療の現場で主に胚（受精卵）を取り扱う専門職です。医師の指示の下、体外受精や顕微授精などを行っています。全国で約2500人、岩手県では6人の胚培養士がいます。

2022年4月に体外受精などの生殖補助医療が保険適用になったことで、患者さんの数が大幅に増えており、私たちの仕事が注目されるようになっています。

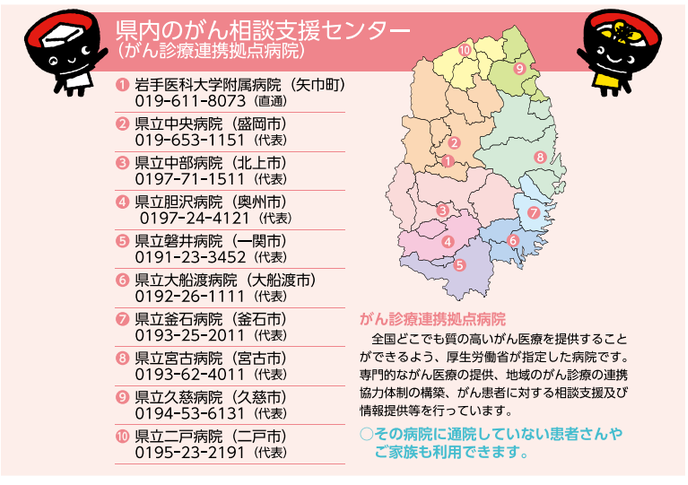
胚培養士は大学の農学部（動物関連）や医療技術専門学校・医療短期大学を卒業した人が半数以上を占めています。仕事内容としては、体外で卵子と精子を受精させ母体に戻すまでの過程で、胚の管理を行います。具体的には精液検査、精液調整、体外受精、顕微授精、胚の凍結・融解、胚移植などがあります。

私たちが普段から行っている胚の凍結・融解などの技術は、そのまま妊孕性温存療法に生かすことが可能です。妊孕性はがん治療を行うことで低下してしまいますので、私たちは医師と連携し胚や卵子、精子の凍結保存を行います。そして、がん治療後に患者さんが子どもを望む場合、体外受精などの手助けを行うことになります。

胚や卵子、精子の凍結保存は、私たちにとって慣れた手技操作ですが、一方で卵巣の凍結に関しては、実施施設が非常に限られているため、手技の習得をする機会がなく、知識や経験が少ないのが現状です。

胚培養士には、卵巣の凍結に関するワークショップを行い、凍結手技や培養技術を標準化することが求められています。正確なプロトコルを提示してほしいという声も現場にありますし、がん治療後に体外受精を行うために長期保存を見据えた凍結物の管理方法を確立する必要もあると感じています。

小岩　佳夏子（こいわ・かなこ）　2018年岩手大大学院農学研究科動物科学専攻修士課程修了。同年に岩手医大附属病院採用。2020年、日本卵子学会認定生殖補助医療胚培養士資格を取得。



動画配信のホームページはこちらから

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、紙上フォーラムの形で実施しました。第15回の本フォーラムの様子は1月26日から3月31日まで岩手日報ホームページで動画配信します。

◇**主催**　岩手県、岩手県がん診療連携協議会、岩手日報社
◇**協力**　岩手ホスピスの会、盛岡かたくりの会、アイリスの会、ペイシェントアクティブびわの会、北上おでんせの会（家族の会）、がん患者と家族の会奥州かたくりの会、一関地域の在宅緩和ケアを考えるリボンの会、日本オストミー協会岩手県支部、岩手喉友会、北日本若年性がん患者会Ｔｈｅ　Ｂｒｉｇｈｔ　Ｆｕｔｕｒｅ
◇**後援**　岩手県医師会、岩手県歯科医師会、岩手県薬剤師会、岩手県看護協会、岩手医科大学、岩手県対がん協会、岩手県予防医学協会、ＮＨＫ盛岡放送局、ＩＢＣ岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、岩手医科大学医師会